神戸親和女子大学での10年間に感謝

柴　　ひ　ろ

はじめに

神戸親和女子大学にお世話になって、10年が過ぎました。

芦屋市の幼稚園園長を退職して、この私が、大学で学生に教える生活をする事になるとは夢にも思っていませんでした。大きい不安と期待をもちながら正門をくぐり学内に入ったのを今も鮮明に覚えています。最初の2年間は、非常勤講師として、3年生の授業を初めて受持ちました。総勢240名の学生に、421教室で「幼児理解」の講義をしたあの緊張感は昨日の様によみがえって来ます。それから、沢山の学生と学びを共にしてきました。専任教員となってからは、親和行事をはじめ、様々な大学の行事や業務に参加させて頂きました。今思い起こせばその一つ一つが私自身の学びと、楽しい思い出になっています。退職にあたり、感謝の気持ちをこめて、10年間を振り返ります。

1　理論と実践の結びつき

私は、大学卒業後37年間、芦屋市の公立幼稚園に勤務しました。定年で退職した後、神戸親和女子大学でお世話になり、学生に「幼児教育」を教える立場になりました。現場での実践研究とは又違った方向で、学生を前に「幼児教育」を専門的理論と実践をどのように結び付けていくのかが、大きな課題でした。「幼児理解」とは何を見ていくのか、「保育者の言葉かけ」の具体的な言葉はどのように発せられるのか、「教師の援助」を考える視点とは何か、「規範意識の芽生え」とはどのような育ちをとらえていくのか。これらの事を現場での実践例を話しながら理論付けることを大切にしました。また、教科書に書いてある事柄に対する具体的な子どもの姿を語り、その時々の子どもの姿を見て、保育者は何に気付き、何を感じ、何を反省しながら自分の保育を振り返り、学びを深めていこうとするのかを、理論的に学生に伝えることが私の役目でした。

現在、「幼児理解に基づいた評価」（平成31年3月文部科学省）は、エピソード記録から保育を見直し保育や子どもの育ちを評価して行く必要性を示しています。日々の保育や幼児の姿を鮮明にエピソードとして記録し、そこから見えてくる幼児の姿を基に保育や子どもの育ちを評価していく事が必要になっています。学生が保育を理解できるようになる為には、実際の幼児の姿をイメージし、教科書に書かれている理論を理解していく必要があります。つまり実践と

理論との結び付けがあってこそ、学生の理解が得られることになります。私は、毎回の授業の中で自分自身の実践のエピソードをとおして、学生が子どもの姿をイメージしたり、実感したりできるよう授業内容を工夫しました。しかし、今振り返ると、自分の実践の曖昧さや、未熟さのため、十分に伝え切れなかった事も多々あり、力不足の連続でした。

2　ゼミ生との活動を通して

3年からの児童教育学専門演習では、学生とは2年間共に歩みます。2年間は長いようで短く、又活動の幅も広く、その一つ一つに全力投球でした。「すくすく」活動や、「キッズオープンキャンパス」でのパペット（人形劇）公演、こべっこランドや、大阪のグランフロント、親和附属幼稚園でもパペット公演の機会を得、学生にとっても大きな学びの場となりました。時には、「そんな事では、子ども達の時間を頂きながら、申し訳ない！」などと、心の内を全開にしてぶつかり合った事もありました。しかし、時を経る毎に保育への価値観を共有し、4年生の秋学期、オープンキャンパスに立つ学生一人一人の成長を感じることができました。その姿に嬉しさと卒業させる立場の者として安堵したこともありました。

卒業論文への取り組みもゼミ生と向き合いながら、一番学ばせてもらったのは私自身でした。毎年12名の卒業論文のテーマを学生と格闘しながら試行錯誤し、課題に取り組みました。12名の卒業論文のテーマは、私自身の専門外の分野もありましたが、学生の書く論旨を熟読しながら、一緒に考え作成しました。一人一人の学生が、自分のテーマに向って真剣に取り組み、それぞれが自分の可能性に挑もうと努力する姿を励ます時間は、私にとっては、苦しさの中にもかけがえのない時間となりました。最後まで諦めずについて来てくれた学生に心から感謝します。

3　たくさんの出会いのなかで

幼児教育に携わり、たくさんの先生方との出会いがありました。学生時代、山本先生のお父様でいらっしゃる山本真一先生の楽しく学びが多かった心理学の授業を始め、身体表現（当時は身振り表現）の保育を打ち出された広岡キミエ先生、現場の先輩の園長先生方、研究会開催に向けて教師の援助の在り方を指導して頂いた村上博子先生、人間の内面理解教育を説かれた梶田叡一先生、道徳教育では、藤永芳純先生の指導を仰ぐ事ができました。教育の在り方はもちろんの事、それぞれの先生方の人間性から滲み出る教育への情熱と確固たる信念に触れさせて頂き、少しでも近付きたいと保育に邁進できたことは、私の教育者としての原点となっています。この出会いの中から得た幼児教育の素晴らしさを、神戸親和女子大学で、少しでも学生に伝えたいと念じてきました。又イタリア教育・芸術研修では、海外の教育にも触れ、それぞれの教育機関に携わる先生方との出会いから、グローバルな視点で幼児教育を考えることが出来、貴重な勉強の機会を与えて頂いた事にも感謝の念で一杯です。これらの事をとおして、何

よりも大切な事は、自分の進むべき教育にビジョンをもつこと、自分自身の人となりを高めていくことであると心に刻みました。これらのことは、これからの私の進むべき人生の道しるべになっています。

おわりに

今年度を最後に、幼児教育に携わる者として、私の教師生活の47年間が終わります。たくさんの出会い、たくさんのご指導を頂き、満ち溢れる学びをさせて頂きました。それをどこまで伝えきれたかは、甚だ微力であるために不十分でした。ただ、現場の実践を土台にして、自分の力の限り、精一杯、力一杯、この神戸親和女子大学で先生方、学生と共に歩ませて頂きましたことは、とても有り難く感謝の気持ちで一杯です。

この頃、見知らぬ若いお父さんやお母さんが連れている幼な子を見るたび、思わず覗き込んで、心から可愛く、愛おしくなります。そしてその子らが健やかに成長し、自分の力一杯を発揮して大きくなって欲しいと切に願っている自分に気付きます。こんな思いを味わわせてくれる幼な子の姿に、嬉しく、心温まる気持ちが沸き起こってきます。このように、人の心を豊かに成長させてくれる子ども達の育ちを支える神戸親和女子大学の保育者養成教育が、益々発展されます事を願い、神戸親和女子大学で過ごした10年間に心から感謝し、教師生活を卒業します。本当に有難うございました。